

## 広重が描いた草津の風景



歌川広重画

とうかいどうごじゅうさんつぎのうち くさつ つたよしばん  
東海道五十三次之内 草津〈蔦吉版〉

いずれも草津市蔵・中神コレクション

江戸時代後期の人気浮世絵師・歌川広重は、その生涯で東海道五十三次を題材としたシリーズ作品を数多く残しました。草津も東海道52番目の宿場として各シリーズに取り上げられ、名所や名物など様々な風景が描かれています。

広重作の草津の浮世絵というと、矢倉にあった「うばがもちや」の店先と、前の通りを早駕籠や荷物を運ぶ人足たちが描かれた作品で、版元名から「保永堂版」と呼ばれるものが思い浮かぶ方が多いと思いますが、今回は「保永堂版」以外のシリーズで描かれた草津の風景について紹介します。

版元が蔦屋吉蔵であることから「蔦吉版」と呼ばれるシリーズでの草津は、東海道ではなく中山道側の草津川渡し場の風景が描かれていま

歌川広重画

ごじゅうさんつぎ くさつ じんぶつとうかいどう  
五十三次 草津〈人物東海道〉



す(左写真)。草津川は平時、流れる水が少なかったため、作品にはあまり水のない川を、人々が着物の裾をたくし上げて、川を渡っている様子が描かれています。また、草津川は天井川であったことから、堤防の切通し部分から見える家並みの屋根は、川床と同じ高さで描かれており、草津川の特徴がよく表れた作品となっています。

次に、風景とともに人物を大きく取り上げた「人物東海道」と呼ばれるシリーズでは、アオバナを摘む女性2人が主役に描かれています(右写真)。アオバナの花びらをしぼり、和紙に塗り込んで作られる青花紙は、当時から草津周辺の名産となっていました。背景には、港に停まる船の帆柱や琵琶湖に浮かぶ船、対岸の山々が描かれています。

(令和4年4月・草津宿街道交流館 武富 みゆき)